矢作川の環境を守る。

矢作川の環境を守る会

はじめに

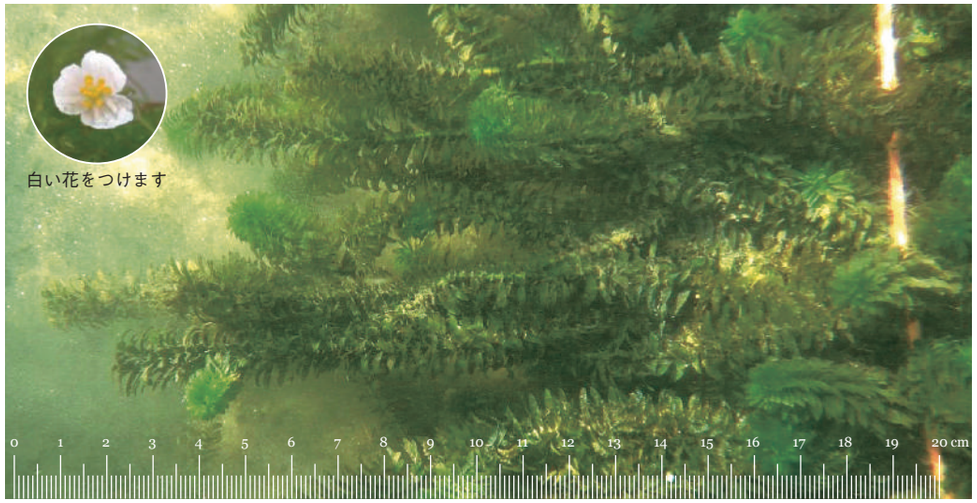
矢作川では外来の水草であるオオカナダモが2010－2011年に大発生しました。オオカナダモが多く繁茂すると、川の環境に様々な影響を与えます。魚釣りをしていても釣り糸にオオカナダモが絡んで厄介なことになります。また、オオカナダモの大きな群落は川の美しい風景を損ねてしまいます。

2013年に矢作川の環境を守る会が立ち上がり、オオカナダモ駆除活動を継続してきました。この冊子は、矢作川の環境をよりよくするための活動記録として作成しました。

オオカナダモとは

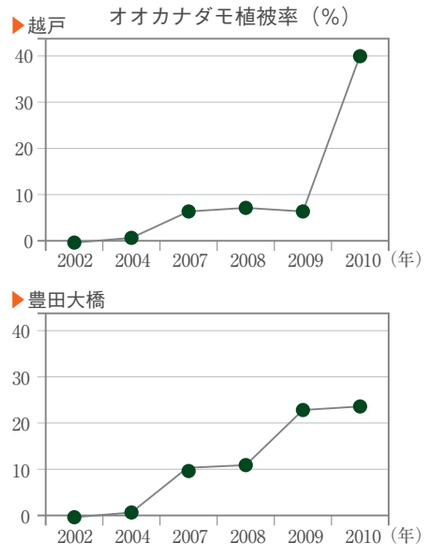
オオカナダモは南アメリカ原産の水草（沈水植物）です。日本には、大正時代に植物生理学の実験用に持ち込まれ、1940年代にはすでに野生化しました。オオカナダモは在来種のクロモや外来種のコカナダモと同じトチカガミ科に属し、それらと似ていますが、一回り大きいことで見分けられます。オオカナダモは日当たりがよく、浅い、流れの緩い場所で、水温16～28℃ぐらいでよく育ちます。

日本の各地で繁茂しているのは全て雄株で切れ藻（植物体の断片）から生長（栄養繁殖）したものです。オオカナダモは、金魚藻のひとつで、「アナカリス」という名前でペットショップなどで安価に売られています。



矢作川におけるオオカナダモ

オオカナダモは2007年ごろから目立ちはじめ、平戸橋下流から久澄橋間（図 赤丸）で大繁茂していました。川岸に近い流れの緩やかなところだけでなく、流れの速い瀬にも広がり、アユの友釣りの障害になっていました。そこで、2011年からオオカナダモの詳細な分布調査に取り組みました（4－5頁）。

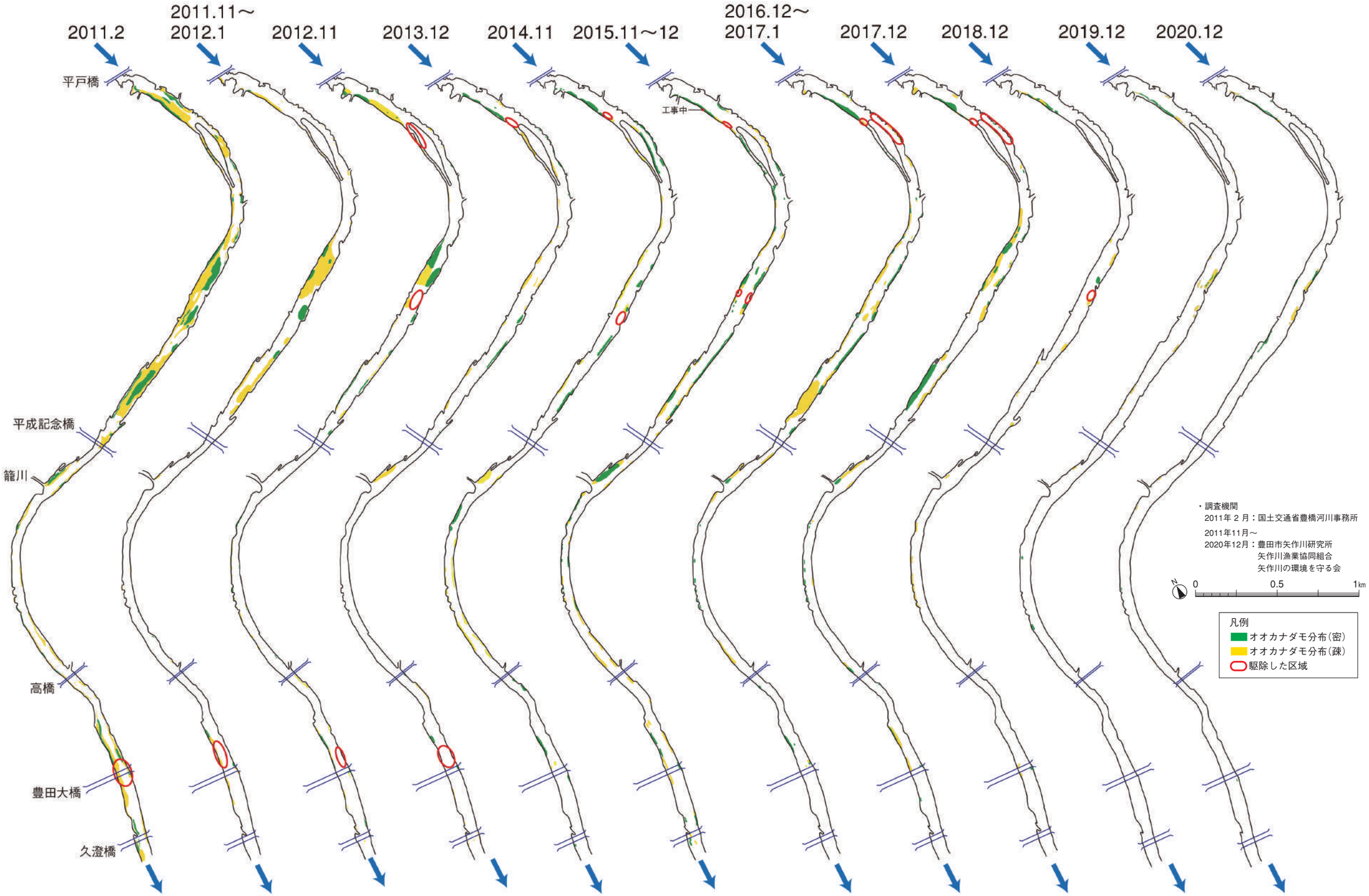


オオカナダモの影響

市街地の近くでは、豊田大橋などから水面を眺めた際にオオカナダモ群落が黒く見え、河川景観の悪化も懸念されています（左写真）。

オオカナダモの繁茂は、川底の石を覆い尽くしてしまうことで、アユの餌となる付着藻類、川底にすむ水生昆虫や底生魚に悪影響を与え、矢作川の水生生物の多様性を低くしています。

矢作川におけるオオカナダモの経年変化

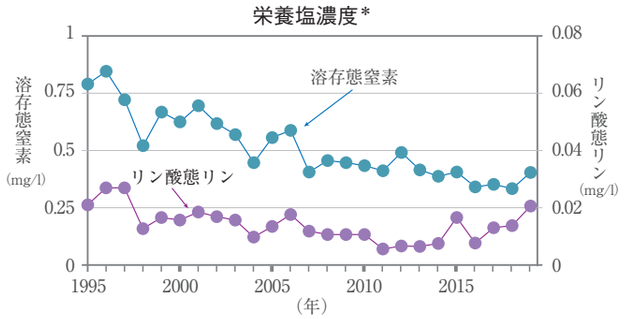


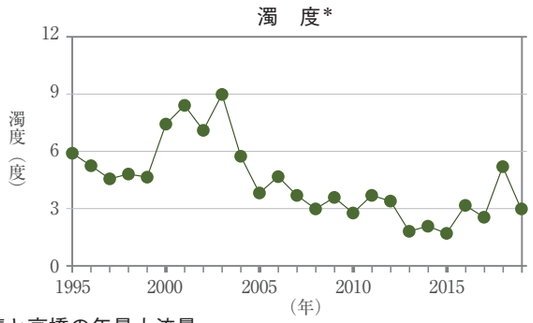
平戸橋から久澄橋下流250mまでの約5.5 km間におけるオオカナダモの分布状況

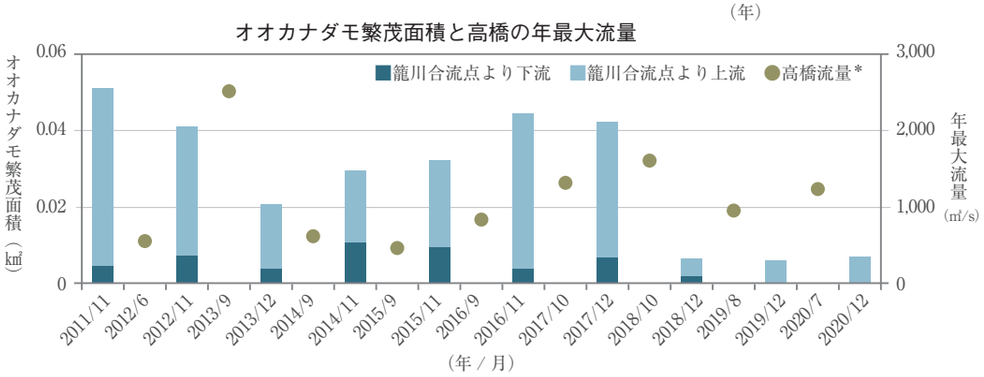
オオカナダモと環境要因の関係

オオカナダモの生長に関係していると考えられる川の水の汚れ（窒素とリン、汚れるとそれが肥料となってよく育つ）と濁り（濁ると葉に光が当たらず育たない）の変化をみると（右図）、オオカナダモが異常繁茂し始めた2007年頃に大きな変化はみられていません。

一方で、2011年、2013年、2017年の大規模な出水はオオカナダモの分布面積を減らしました。このことから出水によるかく乱（根こそぎ流されたり、砂利が当たって茎が切れる）はオオカナダモの繁茂を抑制すると考えられます。







*水文水質データベース（国土交通省）より

オオカナダモが繁茂した平井公園前の矢作川の様子

矢作川の環境を守るために

駆除活動

重機で剥ぎ取ったオオカナダモを集めて、タライに入れて陸上に運びだしました。
駆除作業では、切れ藻が下流に流れないように手網で集めました。駆除とともに、川底の石を動きやすくしてオオカナダモの繁茂を抑制しています。

『矢作川の環境を守る会』は、オオカナダモの駆除活動に参加していたNPO法人矢作川森林塾、矢作川天然アユ調査会、矢作川漁業協同組合（平戸橋支部、豊田支部）、矢作川の釣り師のグループなどが参画し、2013年7月に発足しました。

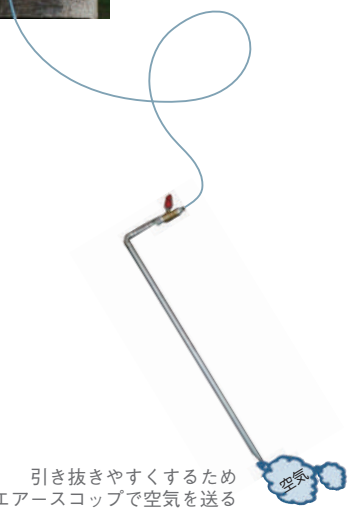
矢作川の環境を守る会は、年に数回の駆除活動を実施し、川の環境改善に取り組んできました。2018年以降、オオカナダモの分布面積が縮小した状態が続いているのは、出水による川の力だけでなく、駆除活動の働きも加わっていると考えられます。これからも川の恵みを受け続けられるように、矢作川との関わりを深め、川を見守っていきます。流域の皆さん、矢作川の環境をよくするために、ご支援とご協力をお願いいたします。水槽で育てているオオカナダモ（アナカリス）を自然界に流さないように気をつけてください。

分布調査

豊田市矢作川研究所では、年１回、地元釣師にご協力をいただき、釣舟で川を下りながら川底を観察し、オオカナダモの分布状況を調べました。この調査の結果を元に、繁茂の経年変化と駆除効果を把握しました。2018年からは、ドローンを活用した調査も併用しています。

調査データは豊田市矢作川研究所提供

オオカナダモ駆除のために
エアースコップ「藻っとトレール」を開発



引き抜きやすくするため
根にエアースコップで空気を送る

矢作川
異常繁茂する生き物 オオカナダモ

矢作川の環境を守る

発行／矢作川の環境を守る会　代表 木戸規詞
〒470-0331豊田市平戸橋町波岩87　矢作川漁業協同組合内
電話／0565-45-1064

2021年3月 発行